

もうひとつ！

眠りについたプラーティ・ディ・カステッロ地区を、延々と続く大通りの街路樹の下、街灯の明かりを無意識に避けながら、兵舎の塀をかすめるようにしてしばらくさまよったすえ、ようやくルンゴテヴェレ・ディ・メリーニに着くと、ディエゴ・ブロンネルは疲れ果て、人気のない堤防の柵にのぼると、川の方を向いて座り、足をぶらぶらさせた。

対岸のパッセジャータ・ディ・リペッタの家々に明かりはなく、影に包まれ、ほんのりと広がる薄明かりの中に家並みが黒く浮かび上がり、その先には街が夜に広がっていた。堤防沿いの通りの木々の葉は動かない。しんと静まりかえったなか、聞こえてくるのは、遠くで鳴いているコオロギの声と、下の川の黒い水がごうごうと流れる音だけだ。川面はへびのように絶えずゆらめきながら、対岸の明かりを反射していた。

低い灰色の薄雲がいくつも絡み合うように空を流れている。まるで、はるか向こう、東の空で行われている緊急の集会に呼ばれているかのようだった。月が高いところから点呼しているのだろう。

ブロンネルはしばらく上を向いて、雲が流れていくのを眺めていた。不思議な活気があり、明るく静かな月夜を盛り上げている。そのとき、突然レジーナ・マルゲリータ橋の上で足音が聞こえたので、ブロンネルは振り返った。

足音が止まった。

誰かが、ブロンネルと同じように、あの雲や雲を点呼する月、あるいは黒い水の流れに街の明かりが反射する川を眺めているのかもしれない。

深く息を吸うと、また空を眺めた。孤独を味わうというささやかな楽しみが邪魔され、誰だかわからない男が現れたことに少し苛立った。だがブロンネルは、この木々の陰にいる。つまり、あの男にはブロンネルがいることなどわかるはずない。それを確かめるかのように、もう一度振り返った。

欄干の上に設置された明かりのあたりに、男の影が見えた。最初、男がそこで黙って何をしようとしているのかわからなかった。明かりの下の彫刻が施された場所の上に、包みのようなものを置いている。包み？ いや、帽子だ。それで？ 何ということだ！ まさか？ 今、欄干を飛びこえたぞ。そんなことがあっていいのか？

ブロンネルは思わず身体を引っ込め、両手を伸ばして目をつぶった。身をぎゅっとすくめると、川にざぶんと落ちる恐ろしい音が聞こえた。

自殺？ こんなふうに？

再び目を開け、視線をまた闇に落とした。何もない。黒い水。叫び声もない。誰もいなない。周りを見まわした。ただ静寂が広がるだけ。誰も見ていなかったのか？ 誰も聞いて

いなかったのか？ 再び影に巻き取られ、頭のてっぺんから足の先まで震え、あの男の恐ろしい運命をなすがままにしながら、時折自分に問いかけた。「終わってしまったのだろうか？ 終わってしまったのだろうか？」目を閉じると、あの不幸な男が川のなかで、死に物狂いでもがいているのが見えるかのようだ。

再び目を開け、もう一度立ち上がり、あの恐ろしい苦悩の瞬間のあと、明かりに見守られた、眠っている町のまったくの静けさが、夢のように思われた。だが、今、黒い水のなかに映るランプの光が何とまたたき揺れることか！ 恐る恐る視線を橋の欄干に向かた。見知らぬ男が置いていった帽子が見える。ライトが帽子を不吉に照らしていた。背中がぞくぞくと震え、血管がちくちくして、全身の筋肉がひきつり、取りつかれたように震えた。まるで、あの帽子がブロンネルを非難しているかのようだ。橋から降り、明かりが当たらないところを探しながら、急いで家に向かった。

「ディエゴ、何かあったのかい？」

「何でもないよ、母さん。そんなふうに見える？」

「いや、あたしには……。もう遅いよ」

「待っていなくてもよかったですんだ。わかっているだろ。何度も言ったのに。何時に帰ってきたっていいじゃないか」

「ああ、そうだっけ。だけど、ほら、縫い物をしていたから……。終夜灯をつけようか？」

「毎晩同じことを聞くなよ！」

年老いた母親は、余計な質問に対する返答に急き立てられたかのようになると、腰を曲げて片脚を少し引きずりながら、息子の部屋の終夜灯をつけ、ベッドを整えてやった。

ディエゴは恨んでいるような目で母親を追った。だが、母親がドアの向こうへ消えてしまうと、哀れんでため息をついた。けれど、すぐに不快になった。

そのままそこで待っていた。なぜか待っているのか、何を待っているのかはわからない。天井がとても低いその薄暗い玄関の小部屋は、煤で汚れた布があちこちはがれ、端切れが揺れていて、その中にハエが集まって眠っていた。

傷んだ古い調度品や野暮ったい家具、仕立屋の仕事で使う新しい物とが入り混じって、部屋にあふれていた。ミシン、籐のボディが2体、布を切るときに使う、どっしりした平らな作業台、大きなはさみ、チャコ、巻き尺、気取ったファッション雑誌が何冊か。

だが、今、ほとんどブロンネルの目には入ってこなかった。

軽い雲が低く広がるあの空の眺めを、ブロンネルは舞台背景のように持ち帰ってしまった。街明かりを映す川も、対岸の、闇の中で薄明かりに浮かび上がる背の高い家々の眺めも、あの橋とあそこにあった帽子も……。さらに、ひどいショックまでも持ち帰ってしまった。

った。あのときあそこにあったすべての物が、まるで夢の中の出来事であるかのように、少しも動じることなく存在していたという、驚くべき印象……。そう、あそこにあった物たちは、ブロンネルよりもずっとはっきりとそこに存在していたのだ。なぜならブロンネルは、木々の陰に隠れ、実際には存在しないに等しかったのだから。それでも、今、恐怖や動搖を感じているのは、ほかでもなく、自分があの瞬間、あの場所に存在していながら不在だったにほかならない。夜、静寂、土手、並木、街灯……。まるでそこにはないかのように、大声で助けを呼びもせずに。そして今、あそこで目にし、耳にしたことはすべて夢であったかのように、ここでこうして呆然自失している自分がいるのだ。

突然、どっしりとした作業台の上に、家で飼っている大きな灰色の猫がひょいと飛び乗るのが見えた。じっと見据える、何も見ていないかのような2つの緑色の目。

ブロンネルはその目に、一瞬、恐怖を感じ、眉をひそめて苛立った。

数日前、その猫は、母がとてもかわいがっていたゴシキヒワの鳥かごを、この部屋の壁からまんまと落としてのけた。執拗に残虐行為をくり返し、鳥かごの棧の間に爪を突っ込んで、引きずり出して食べてしまったのだ。母はまだあきらめきれずにいて、ブロンネルもまた、無惨にも殺されてしまったゴシキヒワのことをずっと考えていた。だが、しょせん猫は猫だ。自分がしでかした悪事にまったく気づいていない。作業台から追い払ったところで、どうしてそんな仕打ちを受けるのか、猫にはまったくわからないだろう。

ブロンネルに対して行われた確証はこの晩、これで2つだ。新たな2つの確証。しかも、2つ目の確証は、猫とともに突然、彼の目の前に飛び出してきた。もうひとつの確証が、あの橋からの身投げという形で突然、振りかかってきたのと同じように。ひとつめの確証はすなわち、虐殺をやりとげた次の瞬間にはもうそのことは考えていないという、あそこにいる猫のようにはなれないということ。もうひとつは、人間は、ひとつの出来事を前になると、物体のように全く動じずにいることはできないということ。関わるまいと必死に努力しても、その場にいないも同然に徹しようとしても、所詮は無駄なのだ。

自分の記憶に苛まれ、他人が忘れてくれることは期待できない。そう。この2つの確証。記憶そのものによる責苦と絶望。

ずいぶんと前、その目でどんな新しい見方ができるようになったのか？ 彼は母親を見つめていた。彼のベッドを整え、終夜灯をつけて戻ってきた母親は、もはや自分の母親のようには見えず、どこにでもいる哀れな老婆に見えた。そのしるしともいえる、少しつぶれた右の小鼻の横にある大きなぼ、血の気なくたるんだ、紫のすじのある頬、奇妙なままでに無慈悲な彼の目と合うとすぐに伏せてしまう、疲れたあの目。そう、眼鏡の奥のあの目は、まるで恥じているようだ。何を？ ああ、何を恥じているのか、ブロンネルにはよくわかっている。いやな笑いを浮かべた。

「母さん、おやすみ」

そして、部屋に閉じこもった。

老いた母親は、また部屋で座って、音を立てないように静かに縫い物をしながら、考えた。

あの子は今夜、どうしてこれほどにも青ざめて、動搖しているのだろう？ 酒は飲んでいない。少なくとも息からは感じられなかつた。けれど、もし、またあの子を駄目にした悪い仲間や、もっとひどいやつらの手に落ちたら？

何よりもそれが恐ろしかつた。

息子が部屋で何をやっているのか聞こうと、時々耳を傾けた。横になっているか、もう眠っているか。そうこうしながらもう一度眼鏡を拭いた。ため息をつくたびに曇ってしまうのだ。寝る前にこの仕事を終わらせてしまつたかった。ディエゴが職を失つてしまつた今、夫が遺したわずかな年金では十分ではない。彼女は夢を抱いていた。それが自分の死を意味していたとしても。働いて、貯金して、お金をたくさん貯めて、息子を遠いアメリカに送るのだ。彼女のディエゴはここでは就職先を見つけられないと、わかっていた。それに、7か月前からディエゴの心を蝕んでいる悲しき無為な生活を続けていては、ディエゴ自身が駄目になつてしまう。

——アメリカなら……—— 息子はとても優秀だった！ いろいろなことを知つてゐた！ 以前は物を書いていた。新聞にだつて……。——アメリカなら—— 息子をアメリカにやるために彼女は死んでしまうかもしれないが、息子はアメリカで生き返る。忘れてしまう。若気の過ちは取り消される。悪い仲間とつきあう原因になつたことも。自制心がなく、邪悪で、多くの善良な家庭に災難をもたらすためにローマに通りかかつた、あのロシア人。あるいはポーランド人だつたかもしれない。あいつは言わずと知れたちんぴらだ！ 大金持ちで、ふしだらなこの外国人の家にみんなで招かれて、馬鹿騒ぎをしていた。酒、女……酔っ払つていて……。酔っ払うと、あの男はトランプをやりたがり、そして、負けた……。自らの手で招いたのだ。自分で自分を破滅に追いやつたのだ。自分を裏切つた暴飲暴食仲間を訴えることになつた。スキャンダラスな裁判は世間を騒がせ、多くの若者の名譽を汚した。向こう見ずな若者たちは立派な良家の、真面目な家の出身だったのではなかつたか？

すすり泣く声が聞こえたような気がして、声をかけた。

「ディエゴ！」

沈黙。耳と目を少し集中させた。

ああ、まだ起きている。何をしているのだろうか？

立ち上がり、つま先立ちして歩きながら、立ち聞きしようとドアに近づいた。身体をかがめ、鍵穴からのぞいた。——読んでいたのか……ああ、そうか！　あのいまいましい新聞！　裁判の結果が……。あの恐ろしい裁判の日々に買ったあの新聞を、どうしてあたしは処分し忘れたのだろう。それに、どうして、今夜、今、帰宅するやいなや、また手に取って、読み始めたのだろう？

「ディエゴ！」もう一度、そっと声をかけ、ためらいがちにドアを開けた。

彼は恐ろしいことが起きたかのように、突然振り向いた。

「何だい？　まだそこにいたの？」

「おまえは？　いいかい、ばかなことをやって、また、お母さんを悲しませたら……」

「ううん。楽しんでいるよ」と彼は答え、両腕を伸ばした。

立ち上がると、部屋の中を歩きはじめた。

「そんなもの、破って捨ててくれ、お願ひだから！」母親は手を合わせて懇願した。「どうして、まだ苦しみたいのかい？　もう考えないでおくれ！」

彼は部屋の真ん中で立ち止まると、微笑んだ。

「おめでたいね。ぼくが気にしなくなれば、みんなも気にしなくなるとでも？　ぼくを生かすためには、みんなでぼうっとしていなければいけないのか？　ぼくが忘れていれば、みんなも忘れてくれるのか？　『何をしていたんだい？』『何も。3年間ほど《休暇》に行っていただけさ。ほかのことを話そう』ってふうに。だけど、母さんにはわからないのか？　自分がぼくをどんなふうに見ているのか、わからないのか？」

「あたしが？　あたしがおまえをどんなふうに見ているって？」

「ほかのやつらがぼくを見ているようにだよ！」

「違う、ディエゴ！　誓っていい！　あたしはただ……そろそろ……仕立屋に行ったほうがいいんじゃないかって……」

ディエゴ・ブロンネルは着ている服を見つめ、もう一度微笑んだ。

「ああ、古いな。だから、みんながぼくを見るのか……。でも、出かける前にしっかりブランシをかけているし、きちんとしているつもりだ。どこにでもいるような普通の人間で通るような気がしているのに。まだ平気で社会に参加できる普通の人間で通ると……。やっかいなのはあれだよ、あれなんだ……」ディエゴは机の上に置かれた新聞を指さしながら続けた。「あんな派手な見せ物を提供してしまった。世間に忘れてもらえると思うなんて、あまりにも謙遜がすぎるほどのことね……。むき出しの、壊れやすく、汚れた、裸の魂たち……徴兵検査に現れた結核患者のように、公衆の面前に姿を現すのが恥ずかしいような魂を晒しものにした。ぼくたちはみんな、自分の恥を被告弁護人の法衣の裾で覆い隠そうとした。聴衆は大笑いだ！　たとえば、あのカリオストロのようなペテン師のロシア人

を、ぼくたちがルクロフと呼び、獅子鼻に金縁眼鏡をひっかけて古代ローマ人の格好をさせていたのを、世間が忘れるとでも思うのか？ みんなは法廷であいつのできものだらけの赤い顔を見たし、ぼくたちがあいつにどんな仕打ちをしたかも知っている。あいつが履いていたブーツをむりやり脱がし、それで禿げ頭をめった打ちにしてやった。あいつは叩かれながら、笑っていた。うれしそうに、嘲笑を浮かべていたんだ……」

「ディエゴ、ディエゴ、お願ひだから！」母親は懇願した。

「……酔っぱらっていた。ぼくたちが酔っ払わせたんだ……」

「おまえがやったんじゃない！」

「ぼくだってそうさ。ほかのやつらと変わらない。単なる気晴らしだったのさ！ そうして、トランプをするようになった。相手は酔っ払いなんだ。わかるだろう、だますのは簡単だった……」

「ディエゴ、お願ひだから！」

「こうやって……ふざけているうちに……。ああ、これは母さんに誓える。そこで、みんなが笑った。裁判官、議長、憲兵までもが。だが、事実だ。ぼくたちはそうと知らずにあいつから盗んでいた。うまく言い換えれば、知ってはいたが、ふざけているつもりだった。詐欺には思えなかった。虫酸の走るような変人が無駄遣いしているお金なんだ……」

中断し、本棚に近づくと、一冊抜いた。

「見ろ。これは後ろめたさだけだ。あの金である朝、物売りからこの本を買ったんだ」

彼は本を机の上に投げた。ジョン・ラスキンの『野にさく橄欖の冠』のフランス語訳だった。

「開いてもいいない」

彼は本を凝視し、眉をひそめた。なぜ、あのとき、この本を買おうと思ったのだろうか？ もう本は読まない、もう1行も書かないと心に決めていた。そこに、あの家に、あの仲間たちと一緒に行っていたのは、愚かになるため、自分で殺すため、どんちゃん騒ぎして夢を紛らわせるため。彼の若き日の夢。人生の悲しい必要性のため、夢におぼれることができなかったからだ。

母親もしばらくその謎めいた本を見つめていた。優しく尋ねた。

「どうして働くんだい？ どうして昔みたいに書かなくなったりなんだい？」

彼は母親に憎しみのこもった視線を投げかけた。顔をしかめながら、まるで身震いするように。

母親は控えめに主張した。

「おまえが閉じこもっていたら……。どうしてあきらめるんだい？ すべて終わったと思っているのかい？ 27歳じゃないか…………。たぶんこの先、悪評をぬぐう機会は何度もく

るよ」

「ああ、そうだね。ひとつあったよ、それも今夜！」彼はあざ笑った。「だが、ぼくはそこに残ったよ。袋みたいにね。男が川に身を投げるのを見たんだ……」

「おまえが？」

「ぼくが。橋の欄干に帽子を置くのが見えた。それから、静かに飛び越えるのを見て、水に落ちる音が聞こえた。ぼくは叫ばなかつたし、動かなかつた。木の陰にいて、そのままそこにいて、誰かに見られていないか窺っていた。そして、あの男を溺死させた。そうだ。だが、そのあと、ぼくはあそこで見つけた。橋の欄干に、明かりの下に、帽子があるのを。ぼくは逃げた、怖くなつて……」

「だから……」母親はつぶやいた。

「何が？　ぼくは泳げない。飛び込むのか？　やってみるのか？　川に降りる階段はそこにあつた。すぐそばに。ぼくには階段が見えたんだよ。でも、見なかつたふりをした。できることなら……でも、もう無駄だ……遅すぎる……消えてしまった！……」

「誰もいなかつたのかい？」

「誰も。ぼくだけだ」

「じゃあ、おまえひとりでは何もできやしなかつたよ。驚いて、動搖しただけで十分じゃないか……。ほら、まだ震えているよ……さあ、お休み……。もう遅いよ……。考えちゃだめだよ！」

老いた母親は彼の手を取り、撫でた。彼はうなずき、微笑んだ。

「母さん、お休み」

「よく眠るんだよ」と母親は声をかけた。手を撫でたこと、手を撫でさせてくれたことで胸が熱くなつていていた。目をふきながら、心を苛む愛情を壊さないように、出ていった。

約1時間後、ディエゴ・ブロンネルは再び川の手すりに座つていた。前と同じ場所に、足をぶらぶらさせながら。

相変わらず、空一帯を灰色の雲が軽く低く流れていた。橋の欄干にあつた名前も知らぬ男の帽子は、もうなかつた。ガードマンが通りかかつて、持つていつたのだろう。

突然、ブロンネルは通りの方を向き、脚を引っ込めた。堤防の手すりから降りると、橋に向かつた。帽子を脱ぐと、あの男が置いたのと同じ場所に置いた。

「もうひとつ！」

まるでふざけてやつてゐるみたいだつた。最初の帽子を持ち去つたガードマンに、いたずらでもしているかのようだ。

それから街灯とは反対側の欄干に行き、あの男の帽子と同じように明かりに照らされ、

欄干の彫刻が施されたところにぽつんと置かれている帽子がどう見えるか、眺めることにした。しばらくのあいだ、手すりにもたれかかって首を伸ばし、まるで自分はもう存在していないみたいに、帽子をじっと見つめていた。そして不意に、ぞつとするような笑い声を上げた。街灯の陰で、待ち伏せてしている猫みたいな自分に気がついたのだ。ぼくが猫なら、さしづめあの帽子はネズミだ……。ああ、もうばからしい！

欄干によじ上ると、髪が逆立つのを感じた。しがみつく手が震えている。その手を開き、宙に身を投げた。

(翻訳：日伊協会文芸翻訳クラス・赤塚きょう子)

E duel! (Luigi Pirandello)

原文はこちらからご覧になれます↓

http://www.pirandelloweb.com/novelle/1922.01_scialle_nero/10.1901_e_due.htm